

## コロナ禍における脳・神経疾患専門病院としての役割を考える 第2報

### ～回復期リハが応える地域のニード～

風晴俊之<sup>1)</sup> 角田真里子<sup>1)</sup> 美原盤<sup>2)</sup>

1) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 事務部

2) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 院長

[はじめに] コロナ禍においてコロナ患者の受け入れ病床の需要が高まり、行政から病床設置の依頼があった。当医療圏域には回復期リハビリテーション病棟(回りハ病棟)は少なく、特に脳神経疾患を専門に対象とする病棟は当院のみである。回りハ病棟をコロナ病床に転換することも視野に入れたが、結果として転換しなかった。第1報ではケアミックス型の自院の役割を検討し、当院はコロナ病床を設けるべきではないと結論づけた。今回、圏域内における回りハ病棟の患者動向から、当院回りハ病棟がその役割が果たしているか検討した。

[方法] 令和元年度、MDC01 について、当院急性期病棟に入棟した患者数および二次医療圏に居住する患者数を調査し占有率を求めるとともに、当院内における回りハ病棟への転床率も求めた。また、令和元年度から令和3年度の3年間、回りハ病棟の病床稼働率、在棟日数、入棟人数(転床、直接入院)について調査した。

[結果] 令和元年度 MDC01 の当院の急性期患者は 951 人、圏域に居住する患者は 1554 人で占有率 61.2%、院内転床率は 33.4%であった。令和元年度からの回りハ病棟の年間病床稼働率は 95.3%、92.2%、96.7%とコロナが流行しはじめた令和2年度には低下したが、その後はV字回復した。在棟日数は 58.4 日、57.7 日、54.1 日と徐々に短縮した。入棟人数は転床が 322 人、314 人、349 人、直接入院は 170 人、169 人、194 人と令和3年度で増加した。

[考察] 圏域に居住する MDC01 患者で当院にかからなかった者は推定 600 人、院内転床率である 1/3 を仮定すると、約 200 人が回りハ病棟の対象患者となる。令和3年度の直接入院 194 人は、圏域の神経系の患者をカバーできた数値と言える。脳神経系患者で在棟日数 50 日台という短い期間で回転できることは当院の強みである。「やりたい医療」ではなく「強みを活かした医療」が地域医療に貢献する。コロナに偏重せず地域内で強みの視点から役割分化を図ることが重要である。